

英国の不安？

『フー・マンチュ博士のミステリー』(1913)にみるインドの影と擬態の脅威

橋本順光

Sax Rohmer の *The Mystery of Dr Fu-Manchu* (1913) は、これまで中国脅威論の文脈で注目されてきた (Frayling など)。確かに Fu Manchu は、文中で “the yellow peril incarnate in one man” (Rohmer, 21) と描写され、英語圏での東洋人のステレオタイプや人種差別の元凶となったことは否めないが、それはその後の米国を中心とする映像化や続編によるところが大きい。事実、本作では辛亥革命を背景に “to upset the balance of the world-to place Europe and America beneath the scepter of Cathay” (143) するような “Young China movement” (116) があると述べつつも、実のところ中国に関する具体的な記述はほとんどない。むしろ作中ではインドについての主題が多く、“to overthrow the Indian Empire” (164) という表現が示すように、インド支配が揺らぎつつあったことへの不安こそが色濃く反映されている。以下、本作が当時の英国の不安と通底していることを、主にインドと擬態の主題に注目することで明らかにしたい。

20世紀初頭から第一次大戦までの間、英国本国において極東は一般に切迫した脅威とはみなされていなかった。例外は南アフリカの鉱山への中国人労働者の導入である。これまでほとんど考慮されてこなかったが、黄禍論としての Fu Manchu という造形において、この問題は重要である。1905-6年の総選挙において、自由党はその導入が “Chinese slavery” だとして政府を非難し、低賃金の中国人労働者が英国人労働者の職を奪うのではないかと、国内労働者の不安を煽った。東洋の労働者が悲惨な境遇で働かされることは許されないという人道的主張を掲げつつ、実質的には、安価な外国人労働力を排除することで国内の労働者を守ろうとする戦略である (Bright)。実際、選挙では、弁髪で鯨髭の苦力の労働者がしばしばポスターに使われ、この争点化により、政府与党は大敗した。例えば同選挙で落選したコナン・ドイルは、帝国維持の訴えが、鎖につながれた中国人労働者というイメージ戦略によって感情的に攪乱されたと自伝で苦々しく回顧している (Doyle, 200-201)。英国史上、中国が中央政界の政争の道具に使われたほぼ唯一の例であるこの総選挙こそ、清朝風の衣装と弁髪の男を表向きは哀れみの対象と描きつつも、事実上、経済的な脅威として排除する図像と言説を英国本国に広く流通させたのである。

とはいえ、当時、東洋の脅威として英国が懸念していたのは、何よりもインドであった。総選挙後、1910年頃までに中国人労働者は南アフリカから本国へ送還され、1911年の辛亥革命後の混乱も、英国ではチャイナタウンでの小さな衝突程度の混乱にとどまった。一方、インドでは反英運動が高まり、南アフリカではガンディーがインド人の地位向上のために運動を起こしていた。こうしてインドの「騒乱」を引き起こす自治・独立問題については、厳しく検閲が行われることとなり、The Indian Press Act of 1910 が制定された。例えばガンディーの *Hind Swaraj, or Indian Home Rule* (1910) は南アフリカで刊行後すぐに発禁となり、英本国でもインドの政治的な問題は自粛されることになる。こうした文脈を考慮すれば、Fu Manchu という中国の首領がインドの盗賊団の男性を手下とし、エジプトの女性を奴隷として、英国のインド支配を覆そうと陰謀を画策するという設定の巧みさが浮かび上がるだろう。ハワイ、香港、“Chinese Turkestan” (86) での殺人事件を伝える新聞の短報を引用し、“the secret turmoil, which manifested itself so far from its center as peaceful England in the person of the sinister Doctor” (85) というように、帝国の辺境で起きている衝突が、実は糸で結ばれ、インド帝国の転覆と結びつけられる構図は、当時の英国の読者にとって、インドの「不穏」な情勢の地続きとしてとらえられたはずである。同時に、1906年の総選挙が示したように、英国支配の秩序が綻び、文明化の結果、「安価な労働力」が国内の不安を呼び起こしてしまう事態にあって、Fu Manchu の邪悪な帝国は「大英帝国」の陰画として、脅威だけでなく憧憬や同一化をも喚起したのではないか。このことは Fu Manchu というシリーズ名自体が示している。物語を牽引する事実上の主役は東洋の怪人であり、それと戦う英国のエージェント Nayland Smith は、平凡な脇役でしかないからである。

医師 Petrie を友人とする Smith が Fu Manchu と対決するという構図があらさまにホームズ物語を踏襲するように、*The Mystery of Dr Fu-Manchu* (1913) は、ヴィクトリア朝英国娯楽小説とそれを支えた帝国への郷愁を隠すことがない。例えば “Red hand” という言葉を残して密室で変死した男の謎を解く冒頭は、ドイルの「まだらの紐」(1892)の変奏であり、理髪店を装ったロンドンの阿片窟へ弁髪で変装した警官が潜入したものの、落とし穴の罠にかかって死ぬのは、ドイルの「歪んだ唇の男」(1891)と Sweeney Todd の都市伝説を組み合わせたものであろう (Hashimoto)。Fu Manchu が、エジプト人女性 Káramanéh を奴隷化し、Petrie が彼女に背德的に魅了されるのも、W. T. Stead の *The Maiden Tribute of Modern Babylon* (1885) を連想させる。ただし、これらの物語で、労働者階級への偏見が、東洋への人種偏見へと転換されている点は見落とすべきではあるまい。確かにドイル作品においても「まだらの紐」から「瀕死の探偵」(1913)まで、Anglo-Indian のように東洋に長く滞在した英国人は、あたかも東洋の毒が伝染するかのよう、英国に脅威を持ち帰る存在として描かれるが、本作では、東西の対決がさらに単純化

される。その最たる例が、同行の旅人を装って近づき、宿で相手が寝入った際に白い布で首を絞め、金品を奪ったというインドの Thug への言及である。Thug は、元来、インド固有の狂信的強盗団として知られ、1836 年に鎮圧が宣言され、19 世紀後半にはその撲滅が英国による文明化の一大成果として喧伝された。しかし、実在性には疑問も多く、物語的誇張は否定できない(van Woerkens)。ドイルが「まだらの紐」で、「ジプシー」が頭に巻く斑点の布に最初に言及するのも、この Thug 像の継承である。ただドイルがその図式をずらしたのに対し、アイルランド出身の両親から生まれたものの、Saxon rover を示唆する筆名の Sax Rohmer は、東洋の異教集団が英国に現れ、白い布で暗殺する逸話(特に 15 章“The Call of Siva”)によって、旧来の偏見をむしろ増幅したのである。

これは娯楽小説ならではの単純化というだけではないだろう。文明の恩恵と富を運ぶはずのインドとの交通網が、逆にコレラや「害悪」を英国にもたらすのではないかという不安は、*The Mystery of Dr Fu-Manchu* の通奏低音であり、それは当時のインドをめぐる言説にも通底していた。その典型が英語教育である。英領インドでは、English Education Act 1835 により、知識人階級にのみ英語で教育することで、外面はインド人であっても精神は英国人という中間層が育ち、そこから文明がトリクルダウンすると期待されていた。しかし、検閲が厳格化された 1910 年、インドでの民族運動の激化に危機感を抱いた東洋問題の権威 Chirol は、英語で教育された植民地の知識人が実は元凶で、彼らが帰属意識を持ってない“Les Déracinés”となった結果、西洋の思想と技術を反英の武器として逆用していると警告した(XIII-XIV)。こうした英印間の境界にいる人々を取り込むため、英領インド政府は、ロビー活動を受けて、1911 年の国勢調査では、Anglo-Indian の定義を「インド在住英国人」から両方の血を引く“Eurasian”へと変更し、例えば Kipling のような従来の Anglo-Indian を“European”に分類した。一方、Fu Manchu もまた、その博士号が示すように西洋で教育を受けており、なまじ“His perfect English”(153)のために、奇妙な語彙選択や“guttural and sibilant”(116)な発声の違和感が作中では幾度も強調されている。そもそも彼がなぜ帝国に反旗を翻すのかという動機は、作中では全く説明されない。擬態ゆえにその「他者」としての差異がかえって際立つため、いわば復讐の動機は、少なくとも当時の読者には説明を要しなかったとも考えられよう。

こうした擬態の脅威が当時の英国社会を覆っていたことは、Fu Manchu とほぼ同時期に発表された Shaw の *Pygmalion* (1914) にも見てとれる。Eliza が、言語学の教授にチョコレートを勧められる場面で薬を盛られるのではと警戒するように(Shaw, 23)、この演劇も *The Maiden Tribute of Modern Babylon* 以来の貧困女性の「奴隷化」物語の系譜に立つ。ここで重要なのは、その英語から“Cheltenham, Harrow, Cambridge, and India”(8)と経歴を見抜かれる、1911 年までの Anglo-Indian こと Colonel Pickering と Eliza の照応であろう。“The creature is nervous, after all”(59)と匙を投げる教授とは対照的に、Pickering は Eliza に“when a child is brought to a foreign country, it picks up the language in a few weeks, and forgets its own”(76)と寄り添うように語っている。これは、Kipling が一例だが、出自を保つため英国に子供を送り出した Anglo-Indian が抱く不安にほかならない。そして劇中では、Pickering 自身、“Don't ask me. I've been away in India for several years”(49)と語るように、彼も Eliza 同様に英国社会への違和感を隠せないでいる。そして Eliza は、Pickering の話を受けて、“I am a child in your country. I have forgotten my own language, and can speak nothing but yours”(76)と、もはや元の故郷の町に戻れず、かといってここにも居続けられないと嘆くのである。この帰属意識の希薄化は、英国による“education has enslaved us”と語り、“Is it not a sad commentary that we should have to speak of Home Rule in a foreign tongue?”(90)と問いかけたガンディーと重なり、ひいては Fu Manchu の擬態と復讐とも通底しよう。そして Fu Manchu と Eliza という対照的な擬態者は、いみじくも「周縁」たるアイルランドに出自をもつ作者によって創作された。両者はそれぞれ対照的な衝撃を与えたが、それだけ社会に同じ不安、Chirol にならえば「英国の不安」が共有されていた証左ともいえる。このように考えるなら *The Mystery of Dr Fu-Manchu* は、中国からの黄禍という言説を装いつつ、何より、インドの影と擬態の脅威を描いた小説というべきではないだろうか。

引用文献

- Bright, Rachel K. *Chinese Labour in South Africa, 1902–10: Race, Violence, and Global Spectacle*. Palgrave Macmillan, 2013.
- Chirol, Valentine. *Indian Unrest*. Macmillan, 1910.
- Doyle, Arthur Conan. *Memories and Adventures*. Hodder and Stoughton, 1924.
- Frayling, Christopher. *The Yellow Peril: Dr Fu Manchu and the Rise of Chinaphobia*. Thames & Hudson, 2014.
- Gandhi, M. K. *Hind Swaraj, or Indian Home Rule*. G. A. Natesan & Co., 1921.
- Hashimoto, Yorimitsu. “Who is Fu Manchu?: The Yellow Peril in Britain 1895–1913.” *Yellow Peril: Collection of British Novels 1895–1913*, edited and introduced by Yorimitsu Hashimoto, vol. 1, Edition Synapse, 2007.
- Rohmer, Sax. *The Mystery of Dr. Fu-Manchu*. Methuen, 1913.
- Shaw, Bernard. *Pygmalion: A Play in Five Acts*. Constable, 1914.
- van Woerkens, Martine. *The Strangled Traveler: Colonial Imaginings and the Thugs of India*. University of Chicago Press, 2002.